

追悼 松本正夫先生

松本正夫先生のご逝去を悼む

中世哲学会委員長

加藤 信 朗

松本正夫先生は今年3月23日、しずかにこの世を去られた。

中世哲学会の設立に力を尽くされ、本学会の維持発展のために献身的な努力を注いでこられ、草創以来の大黒柱であられた先生はもうわたしたちの傍らにおられない。

先生が設立委員、委員、委員長を勤められた1951～79年のほぼ30年間に本学会は研究の実質においても会員の組織においても着実に進展し、わが国における哲学を支える代表的な研究団体の一つに成長した。それは戦後50年間の日本における哲学の地道な発展を証するものであった。そこから多くの若い研究者が巣立っていった。事実、今日、本学会の重鎮をなす先生方の若き日の貴重な研究のかずかずが本学会を中心にして発表されたのは学会誌『中世思想研究』の示すところである。この研究活動の中心に松本先生はいつもおられた。毎年の研究大会において、前方の席を占められて、一つ一つの研究発表に実のある質問をなさっていらした先生の姿がありありと目に蘇ってくる。それはつとに『「存在の論理学」研究』を世に問われて以来先生の哲学思索を貫いてきた、アリストテレスとトマス・アクィナスの精神に沿う実在形而上学の不動の体系から発するものだった。この点で先生は頑強でいらした。この先生の頑強さをいま懐かしく思い起こす。そして、そのゆえに先生をお慕いする。そこには学問の厳しさと純粹さがあり、それが本学会の研究の厳しさと純粹さを支えてきたのだと思う。

他方に、先生は談笑の場では人をからかうことが好きだった。このゆえ

に、若いわたしたちは先生に引きつけられた。また、多方面のおつき合いと知人をもたれたのも人柄の広さのゆえだった。要所要所では大切なところを見逃さず、気を配っておられ、善い意味で政治的な方だった。設立当初の困難な時期に、多くの知友の力を結集して本学会の基礎を築きあげてこられたのはこの先生の真摯であり、かつ、無邪気なお人柄によるところが大きいと思う。

わたしたちはこの先生の力によって築き上げられた成果を享受している。しかし、戦後数十年のわが国の学問の、ある意味で幸福であった時代は、いま、一つの曲がり角にさしかかっている。わが国の大学における人文学研究の将来には暗い影がさしている。人間の存在の根拠、魂の基底がいまこそ真摯に顧みられなければならない時であるにもかかわらず、また、そこに立ち返り、そこから出発することによってしかわが国の文化の将来はないのに、人々の心はそこからはますます遠ざかりつつあるように見える。中世哲学のもつ多面的な意味が今こそ掘り起こされるべき時であるにもかかわらず、人人の心はそこに遠いように見える。残されたわたしたちに負わされた負荷は大きい。松本先生を初めとする諸先生方の本学会設立の初心に立ち返って、わたしたち一人一人がその責務を果たしてゆかなければならないのだと思う。

お通夜と告別式に参列して、司式司祭から先生の晩年の日々をお聞きして、松本先生は本当に深い信仰の人だと思った。その信仰がああ真摯な学問と闊達なお人柄の底にあったのだ。列席していた友人と帰る途すがら、「死の哲学」「死の神学」の端初は何処にありうるのかを語り合った。「時を越えるもの」、「永遠」が何処にあるか、人は何処で永遠とかかわり合うのかを口にするのがあまりにも少なくなった時代にわたしたちはあるように思う。しかし、永遠への思いがあるところでだけ、中世哲学、あるいは真なる哲学への思いが人の心にきざすのではないだろうか。在りし日の松本正夫先生の温顔を写したお写真を前にしながら、死と永遠の問題に徐々に思い入る時を得たように感じた。